

---

# リブラリアンズ

士郎従道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リブラリアンズ

### 【Nコード】

N0935BA

### 【作者名】

土郎従道

### 【あらすじ】

太古から人類の前に現れ続ける天敵 “本の蟲”。現代において“本の蟲”を倒すことができるのは、対“本の蟲”用完全殲滅兵器《Anti-Cosmophilos Completely Destroyer》だけ。そしてその兵器を扱うことができるのは 図書館司書たちだけだった。

## プロローグ 【本の蟲】 人類の敵。コスモファイロス。

地中海・北岸、フランス領海 三月二十日

『こちらC1、<sup>シャリーユーニテ</sup>“冷たい炎”を目視で確認』  
『C2、同じく確認』

フランス軍の戦闘機が二機、瑠璃色の空を寄り添いながら一矢乱れぬ動きで飛んでいく。

機体九時方向の海上では、人が豆粒に見えるほど大きな青い炎の塊がぬらりと揺らめいている。『冷たい炎』と呼ばれる、人類の敵

“本の蟲”の一種だ。

『了解、両機とも攻撃を開始せよ』  
ぐん、と戦闘機の機首に取り付けられた翼が動いた。直後に二機は急旋回。炎へ突進するように速度を上げていく。

途端に炎が形を変え始める。外炎は複雑な切削がされた宝石のように多数の面を作り出し、内側からの光が反射と屈折を繰り返して、周囲をまばゆい光で染め上げた。

二機の戦闘機は限界まで冷たい炎に接近し、主翼の下部からミサイルを各機が二発ずつ発射した。戦闘機はそのままほぼ直角に急上昇

昇  
『Gutenber<sup>ギュータンベル</sup>g M1”全弾着弾！ やったか！？』

本の蟲に慣性や熱を用いた攻撃はほとんど通用しない。せいぜい足止めができるくらいである。

二機の戦闘機が打ち込んだミサイルは、人類が持つ対本の蟲用殲滅兵器の一つ、“グーテンベルク”シリーズのミサイル型。ギュータンベルはそのフランス語訛りだ。

冷たい炎の姿は爆煙で見えない。二機はしばらく旋回を続けて様子を探った。ミサイル型グーテンベルクを四発も打ち込んだのだ。

これで生き残っているわけがない……二機のパイロットはどちらもそう考えていた。

風で煙が徐々に晴れていく。ぼんやりとした青い光が見えた。その瞬間、戦闘機のパイロットたちは目を疑った。

「シャーリーユニテ、冷たい炎に損傷なしっ！ 繰り返す、冷たい炎に　！？」

揺らめく炎の一端がうねるようにして伸び、超音速で航行する戦闘機を一瞬で貫いた。僚機はかろうじて避けたが、左翼を失い真っ逆さまに海へと落ちていく。

海上に展開していた艦隊から機銃掃射とミサイルでの攻撃が始まった。しかし、炎はびくともせずただゆっくり揺らめいている。それどころか戦闘機に放ったように、ふたたび外炎を伸ばし今度は艦隊までも串刺しにして持ち上げ、水面へと叩きつけた。

地中海・南岸、アレクサンドリア　同時刻

「あーあ……地中海方面軍のシュフラン級とラファイエット級が全滅だなあ。シャルル・ド・ゴールが出撃しなかったのが救いですかね」

暗がりには輝くモニタを見つめながら、金髪の男が呟いた。偵察衛星からの映像がフランス軍と“冷たい炎”の戦闘を映し出している。

「“グーテンベルク”のミサイルタイプは失敗作みたいだわ。今ごろ報告を受けて欧州図書館は大騒ぎね」

男の背後に立つ女は言つてにやりと笑う。黒の長い髪が闇に溶け入るようにして伸びていた。

女が胸のポケットから携帯電話を取り出した。

「もう助け舟をだしちゃうんですか？ さすが日本人は情が深いですわね」

男がくつくつと笑い、金縁の眼鏡を指で押し上げる。

「ただ恩を売るだけよ……あー、あー。聞こえるかしら。わたしの言ってることわかる？ ……そう、よかった。一度しか言わないからよーく聞きなさい。これは警告よ。今すぐ“冷たい炎”周辺に展開している部隊を撤退させなさい。なに？ どうやって回線をつないだかなんてどうでもいいじゃない。今すぐよ、今すぐ……ああもう、わからないの？ わたしよ、わたし。フレデリクに雪原由貴からの忠告って伝えておきなさい。いい？ もう警告したわよ。大丈夫よ、“本の蟲”の相手は『本の専門家』にまかせておきなさい」スピーカーの奥からはまだ、怒鳴るような声が聞こえていたが、女は素知らぬ顔で回線を閉じた。耳に掛かった黒髪を掻き上げて、ふん、と鼻を鳴らす。

「まったく、ユーロは無粋ですねえ。“本の蟲”の相手をするのに軍隊まで持ち出すんですから」

「合衆国議会図書館の影響よ。時代の流れはしかたがないわ」

「お、そろそろですよ。ミコさんが映ります」

モニタに映る、偵察衛星からの映像に黒い船影が現れた。黒々とした巨大な空母だ。甲板には一機も艦載機がなく、ただ艦首付近にノースリーブの白いワンピーススカートを着た少女が立っている。

少女は頭を大仰なフルフェイスヘルメットに覆われ、その後頭部からは幾条もの太いシールドケーブルが飛び出ている。ケーブルは平らな甲板を這うように延々と伸び、艦橋の根本あたりで収束しながら艦内に潜り込む。

少女のヘルメットに声が響いた。黒髪の女の声だ。

『“蟲”は見えたかしら？』

「うん……よく見える」

少女は落ち着いた、静かな息遣いで答えた。

『そう。いつもどおりやればいいのよ。終わったら一緒にビールでも飲みましょう』

「……お姉ちゃん、私、未成年」

風になびくスカートの裾を左手で抑える。右手には、二画面式の電子ブックリーダーがあった。

少女はブックリーダーに電源を入れた。画面には『パピュルス・ビブリオテーカーエ・アレクサンドリナエ』の文字が踊る。ラテン語で『アレクサンドリア図書館のパピュルス』という意味だ。

アレクサンドリア図書館『ビブリオテーカー・アレクサンドリナ』が誇る、世界初の対“本の蟲”用完全殲滅兵器“パピュルス”は、フランス軍が用いたミサイル型の“グーテンベルク”と形や機能こそまったく異なるものの、目的は同様に、“本の蟲”を打ち倒すためだけに存在する。

“グーテンベルク”と“パピュルス”の違いは、前者が通常兵器の形を模していて誰にでも扱えるのに対し、後者は使いこなせる者が少なすぎるといふ点だ。“パピュルス”は人間の想像力を具現化する。そのためには使用者の想像力そのものが他者よりも抜きん出ている必要があった。

しかし威力には圧倒的な差がある。破壊力が想像の大きさに依存する“パピュルス”は、使用者の想像力が大きければ大きいほどその威力も高まる。少女はその“パピュルス”を扱うことができる、世界でも数少ない人間の一人。そして最強の一人だ。

少女はため息をついてから、パピュルスに表示された文字の朗読を始める。書き出しは、ヘーシオドスによるギリシア神話の叙事詩、『神統記』だ。

「【我らへリコオン山がムウサイより謳い始めむ】」  
海面が、少女を中心として大きく波立つ。強い風も吹きすさぶ。地響きがあたり一帯に鳴り響く。

“冷たい炎”の外炎はみたび炎の腕を形作った。何本ものその腕が、波の中心である少女へと瞬速で迫る。

少女はなお朗読を続けた。波も風も地響きも、さらに大きくなっ  
ていく。

炎の腕が少女の肌突き刺さろうとしたそのとき、光が空母ごと

少女を覆った。一点の混じりけもない、完全な潔白の光だ。

光に腕を焼かれて、“冷たい炎”の鳥のような叫び声が夜空に轟いた。瞬時に腕を戻し、また多面体構造に自分自身を作り替える。

少女を包む光が四方へ霧散した。光は雪のように海面に降り注ぐ。

「【彼らはそこから出てはならぬ。ポセイドオンが深き海から  
! ! !」

ぴたりと地響きが止まる。少女は溜息をついた。

“冷たい炎”が浮遊している真下の海面に、黒い影が浮かび上がった。炎の影ではない。海の中からゆっくりとその影は上がってきているのだ。奇妙な静寂が漂っていた。

海面下の黒い影がさらに巨大化していく。そして、ついに海水を押し上げてその正体を現すかというその瞬間、ふたたび炎の鳴き声が響き渡った。

影から放たれた太い光線が“冷たい炎”を包んだ。光線の中には天にも届きそうなほど巨大な、青黒い巨人が映っている。右手に三又の槍を持ち、いまにも“冷たい炎”を打ち倒さんと振りかざした。炎の面を構成していた外炎が波打ち、内側へ折り重なるようにしぼんでいく。

「お姉ちゃん、終わったよ」

少女が言ったその直後、光の柱の中に立っていた青黒い巨人が、その三又の矛で“冷たい炎”を貫いた。

“冷たい炎”はもはや消え失せていた。はじめからなにもなかったように、痕跡一つ残さずに消し去られたのである。

ただ巨人が光の中で静かに立ち尽くしている。その巨人も、少女がブックリーダーの電源を落とすと頭から砂粒となって崩れ去ってしまった。

『ご苦労さま。よくやったわ、ニコ』

「お腹すいたよ、お姉ちゃん。はやく日本に帰りたいな」

少女は冗談っぽく言ってから、またひとつため息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0935ba/>

---

リブラリアンズ

2012年1月2日02時51分発行